

トランスジェンダー

吉村 人憂

平成三年二月二〇日



# 第1章

## 1・1

小学校の時に読んだ「世界がもし百人の村だったら」という本には、世界人口における一割の人々が同性愛者であると書かれていた。もちろん、あの本が書かれた当時よりも、何億人という単位で人口増加が起きているから、現在の統計は知らない。

その時はついぶん自身を持った。私と同じような同性愛者が十人に一人もいると知ってけれど、中学、高校と進学するに従って、少しずつその統計に疑いを持ち始め、今やほとんど信じてなどいない。

そう。この六百人を超える高校においても、私は自分以外の同性愛者を見たことがない。まあ共学であるから、三百人くらいの男子はどうでもいいけれど。

高校に入りさえすれば一人くらい可愛い女好きな女の子が一人くらいいると思うんだけど、そんなことはなかった。何気なく好きな人がいるのかと聞いていみても、出てくるのは男

子の名前ばかり。

のんびりと歩く私の隣を、二人の女の子が通りすぎる。ジャージ姿の彼女達からは、女の子の香りが沸き立つ。ああ、今すぐに捕まえて部屋の方香剤にしたいくらい蠱惑的な香りだ。確かあの香りは高級脂肪酸と安息香酸エストラジオールの香りらしいけど、私が使えるあらゆる手段を用いても、入手出来なかった。

彼女達の残り香を満喫しながら、溜息を吐いた。

いつその事、男子として生れればよかった。そうすれば合法的に女の子を漁ることが出来るのに。まあでも、それは今ある特権——つまり合法的に女子更衣室に入れるという特権を手放すことになるけれど。

目的の生物準備室へと入り、誰もいないことを確認して慎重に扉を閉める。さて、高級脂肪酸なんてすぐ見つかると思うけど、問題は安息香酸エストラジオールだ。どこにあるんだろ。というか、そもそもこの部屋にあるのかも謎だ。

「オール」って名前だから、あるならたぶんアルコール系の棚だろうけど、うーん無いなあ。くっ……。ここで諦めたら、もうどうやっても手に入らない。

「あなた、こんな所で何を探しているの？」

突然後ろから刺さった声に、一瞬動けなくなる。まずい！ でも、声の感じからして、先生ではないような、もつと若い声であったような気がする。少し落ちついた私はなるべくゆっくりと振り返る。

セーラー服の女の方は、学年章からして三年生に思えるけど、私より背が小さいからか

少し安心した。

「えっと、先輩に頼まれて薬品を探しに……」

適当に今思いついた言い訳を吐く。

「うーん、何て薬品？」

「えっと、安息香酸エストラジオール……」

言ってから私は後悔した。千切れかけていた蜘蛛の糸が繋がるかもしれないという希望が、私に安易な選択をさせる。もし、彼女が安息香酸エストラジオールがどんな薬品か知っていたら？ もし、彼女がそんな薬品を使う実験なんて無いと知ったら？

背中に冷や汗が溜り、一刻も早く彼女の前から逃げ出したくなる。実際その選択もありかもしれない。既に私は何時ばれるかも分からない適当な嘘を吐いている。

「それならこっち、これだと思う」

彼女は部屋の隅にある引き出しを開けて、中から茶瓶を取り出して私にさし出す。茶瓶には内容を示す紙が貼ってはあったが、相当古いのか全く読めないくらいに擦り切れている。

「あつ、えっと、ありがとございます」

私はその瓶と、さっき見つけたオレイン酸の瓶を持って、慌てて生物準備室を飛び出した。

私はそのまま家に向かった。途中で瓶の中身を何か適当なものに移して、瓶は生物準備室に戻せばよかったかと思っただけど、もう今更どうしようもない。

それよりも今は、この二つ混ぜた液体がどんな芳香をもたらすのかが楽しみで仕方ない。台所から紙コップを持ってきて、部屋の扉には鍵を掛けて、念の為カーテンを閉めて外部から遮断する。

机に紙コップとオレイン酸の茶瓶、そして安息香酸エストラジオールの茶瓶を並べてみる。興奮しながら、まずはオレイン酸の瓶を開け、黄色い粘性のある液体を紙コップに注ぐ。そして、安息香酸エストラジオールの液体をその中に足していゆく。

それは透明で粘性の高い液体だった。よくよく考えれば、これは安息香酸エストラジオールとは全く関係ない薬品かもしれない。生物準備室で会ったあの女性に貰ったから、あたかもそう思ってしまったけど、薬品のラベルは擦り切れて読めないから、本当にその液体かどうかは分からない。

まあでも、たぶん大丈夫だと思う。だってどうせこの液体を食べる訳じゃないんだから。二つの液体はよく混ざらなかったので、台所から割り箸を持ってきて紙コップの中の液体を適当にかき混ぜる。試しに液体の付いた割り箸を鼻に近づけてみると、まさしくあの女の子の香りがした。

すごい、これはすごい。紙コップの中をよりかき混ぜると、より濃い香りが充満してすごく興奮してくる。

私は一度部屋の鍵とカーテンを確認してから、セーラー服のブレザーを慎重に脱いでゆく。

筆筒から自分のパンツを取り出して、割り箸に付いた液体をそれに塗り付け、それを

持つてベッドに寝そべる。少し黄色い染み付いたパンツから、その香りを貪りながら、右手でパンツの中の秘所に手を伸ばす。

既に湿った秘所の、陰核を親指と人差し指で挟むように弄りながら、パンツを舐める。舐めてから、この液体は舐めて大丈夫なのかと不安になったけど、口の中に広がるなんとも言えない甘さに耐えられずに、パンツをしゃぶり続けることにした。体の中が満されるような不思議な甘さの中で、優しい絶頂を向かえた後、急速に意識が遠のいていった。

私はあえてそれに抗わずに、そのまま何も考えず残りの意識を手放した。

起きた時は朝だと思われた。ぼんやりとした意識の中、どうやら私は昨日夕食も食べずに寝落ちしたらしい。部屋の中はやっぱあの香りに満ちていた。

急に股間の辺りに違和感を感じた。寝ぼけた感覚で伸ばした手は、股間に何か柔らかい物体を掴んだ。

「ああ……？」

謎の感覚に私の意識が急速に覚醒していくような気がした。いや、もしかしたらこれは夢の中なのかもしれない。

私は体を起こして、股間に出来た謎の膨らみを凝視した。右手は昨日のまま下着の中に指し込まれていて、確かに何かを握っているし、私自身、体の一部が握られている感触がある。

これは、もしかして、右手なのかな？ でもだったら、この謎の感触をどう説明すればいい？

恐怖や不安や好奇心やらが原型を留めないほど入り混った私の感情は、何故か真相を確かめようとスカートを捲り、私のパンツを下ろさせる。

右手が握っているものを刮目して、私のまどろみは一瞬に吹き飛ばされた。どう考えても、それは男のアレ以外の何者でもなく、それが女の私にしっかりと生えてしまっている。私は一度深呼吸を試みた。落ち着け、とりあえず冷静にならなければ。いや、落ち着いたところで今更どうにかなるわけでもないか……。

一瞬の戸惑いは喉元を過ぎて、今度は次第に好奇心が湧き上がる。このおもしろそうな肉棒を弄り倒したら、一体どんな反応が返るのか試してみたい。

そう考えた途端、むくむくとその肉棒は膨張してきた。そうして脱皮した肉棒は初々しい桃色で、それを見た私は思わず口元が緩む。

やった事はもちろん無いけど、どう扱うのかは分かる。私はゆっくりと右手で皮を掴んで、上下に動かしはじめた。

「んんっ……」

当たり前といえばそうなのかもしれないけど、今まで感じたことの無い未知の何かを感じた。

ああ、これいいなあ。

もっと強い快感を貪ろうと、右手をより早く動かしてみた。気持ちよさに声が漏れそうになったから、布団を噛んで声を抑える。



電車に揺られて高校へ向う。いつもなら、せつせと小テストの勉強を始めているところだけど、今日はとてもそんな気分じゃない。

さて、どうしたものか。もちろん今日のテストではなくて、私の体に突然出現した肉棒のことだ。色々考えてはみたけど、もはや昨日嗅いだり舐めたりしたあの薬品しか思いあたりはない。あんな薬一つでこんなことになるなんて到底考えられないけど、もはやこれ以外に考えられるものはない。

確かにあの茶瓶に張られたラベルは擦り切れていて、あれを安息香酸エストラジオールだと私が信じたのは、生物準備室にいたあの女性が言ったからであって、それ以外の何かがあったわけではない。

とりあえず、昨日作った薬は処分。二つの茶瓶は、例えば妹が私の部屋へ侵入したとしてもまず見付からない場所へと隠した。

本当はあの不気味な薬品を早急に処分したいところではあったけど、元に戻るための役に立つかもしれないので、一応隠し持つことにした。

しかし、こんな体で学校なんか行く必要はなかったのかもしれない。妹には適当に、頭痛があるなどと言えばごまかせるだろう。だけど、家に引き籠ったところで何か解決策を思いつくとは思えないし、むしろ、この体が女の子を前にどんな反応を示すのか試してみたくなくなってしまった。

そう、この体はある意味都合がいい。外見はどう見ても女だけど、中身は男。

スリルと期待を混じらせながら、学校へ到着した。

\*  
\*  
\*

古いスピーカーが吐き出すチャイムによって、淡々とした座学が終わった。小テストは酷い出来だったけど、まあそれは甘んじて受け入れよう。次は今日のメインディッシュ、体育だ。今日はバスケットボールかな。だけど競技は何であってもいい。

私は他の女の子と共に、着替えを持って更衣室へ向かい、更衣室の扉の前に立つて、あくまで平静を装って扉を開ける。

何回も嗅いでいたはずの女の子の香りが鼻腔を、脳を刺激する。ドーパミンかエンドルフィンかすごい快感を感じて、胸一杯にその香りを吸い込んでみた。

すごい、いつもいい香りだと思ってたけど、今日は一段とすごい！ やっぱりこの肉棒のせいなのかな。

股間の肉棒もむくむくと膨張しはじめた。

既にそれなりの人数の女の子が詰っている。今入れば、誰か一人くらい、私の股間の膨らみに気づくかもしれない。入るのはやめてトイレに行くべきだと、理性が諭すが、私はゆっくりと更衣室の中へ入った。

狭い更衣室の中では、セーラ服から下着、そして体操服へと変化する女の子達がひしめいている。彼女達の白い肌や胸の膨らみを見るだけで興奮して、今すぐにパンツを脱ぎ捨

て、肉棒を扱きなくなる。そうであっても、肉棒は完全に膨張していて、今ズボンをはけそうにない。

ああ、彼女の胸は柔らかそうだ。後ろから揉みしだきたいなー。

かざみどり  
ともか

目線の先には私が目にかけている、女の子、風見鶏 朋香だ。多分クラスの女の子の中では群を抜いてかわいい。それに陸上部で鍛えられた体はバランス良くしまっていて美しい。男子からの人気もあるらしいけど、彼氏を持っているとは聞いていないから、まだ処女なのだろう。

ああいいなあ。彼女の処女膜マンコを、私の肉棒で蹂躪したいなー。